

2021. 5. 9. 主日礼拝説教
聖書：ヨハネによる福音書 6章 16-21節
『恐れることはない』

「恐れ」とは一体何なのでしょう。それは多くの場合、自分自身にとっての現実的な生活の諸問題なのでしょう。そこにはいつ果てるとも知れない煩わしい人間関係や些細なぶつかりあいから生じる軋轢や感情のわだかまりが累々と広がっているかに思えます。そういった現実の不安を抱えながら将来を思い巡らしても、そこには病いや高齢につけ経済的な諸課題が拍車をかけるかのように自分の上に重くのしかかる姿を思い描いてしまいます。いずれもやはり「恐れ」なのです。

今日与えられましたヨハネによる福音書は小標題として「湖の上を歩く」という物語を提示しています。そこにはイエス不在のまま湖に漕ぎ出す弟子たちの姿が描かれます。前節の「給食物語」の息づく熱狂から一転して、薄暗い湖畔からの出帆が語り始めになっています。波と風の音以外は弟子たちのざわめきさえも福音書記者は記してはおりません。さて、イエスの姿はといふと節の「ひとりでもた山に退かれた」ままなのです。

弟子たちは自分たちの力で「二十五ないし三十スタディオン」漕ぎ出したといいますが、1スタディオンは185メートルとして、ほぼ湖の半ば位まで辿り着いていたこととなります。その間、「強い風が吹いて」流されたにせよ波に抗い続けたにせよ、おそらくかなりの時間が経過していたはずだし、また同時に風と波に一晩中翻弄され疲労困憊だったことでしょう。その時、山にいるはずの主イエスと湖上で対面するのです。マタイ福音書 17章やマルコ福音書 6章の類似箇所では、弟子たちはイエスの姿を見て幽霊だと怖じ惑う様子が描かれています。

その時、イエスはたった一言、しかし全てを語り尽くします。「わたしだ。恐れることはない」と。イエスの湖上歩行は旧約に起因しますが、それだけだと単なる奇跡物語の塗り直しに終始してしまいます。そうではなく、ここでは弟子たちに対して「わたしだ」（エゴー・エイミ）と単に自分への気づきを求める言葉としてではなく、旧約から引き継がれる神顕現定式を以て宣言され

るのです。そして、それに続く「恐れることはない」という寄り添いに満ちた慰めの言葉が柔らかに暖かく追従して行きます。「彼らはイエスを舟に迎え入れようとした。すると間もなく、舟は目指す地に着いた。」と物語は締めくくられます。つまり、イエスの呼び掛けに応えたのは弟子たち（教会）であったということ。応えたがゆえに目的地に達し得たということなのです。この応答関係によってこそキリスト論がより一層確かな事柄として強められて行くのです。

わたしたちにとって「恐れ」とは一体何なのでしょう。始めに語ったような生活苦もちろんあるでしょう。しかし、それだけではないのです。「恐れ」とは弟子たちが漕ぎ悩んだように、自分自身の努力や頑張り、知恵や経験ではどうしようもない生きる悲しみなのです。そこには愛する者との別れ、癒されないであろうかも知れぬ病い、他者を愛する対象として見れない辛さなど様々な悲しみが渦巻いています。その現実のさなかに「わたしだ。」と宣言され、第三者として外から厳しい口調で叱るのではなく、わたしたちの悲しみの内側から優しく愛に満ちた二人称で呼び掛けられる「恐れることはない」という寄り添いの言葉に、わたしたちももう一度うなだれたこうべを上げ、生き直すことへと感謝を携えて応える者とされたく願います。